

	<h1 style="color: red;">エッセイのアクセス数</h1> <h2 style="color: red;">SCE・Net 小松昭英</h2>	<h3 style="color: red;">E-131</h3> <p style="color: red;">2020年 8月27日</p>
---	---	---

筆者の「SCE・Netの窓」のエッセイのアクセス数を調査したところ、下表に示す結果になった。

表 アクセス数調査結果

No.	自然検索結果	発行日	アクセス数			
			2020	2020	2020	2020
			04.14.14	05.18.14	07.15.14	08.13.15
1	システム構築による課題解決	19.07.11	8,891,360	0	2,413,880	5,980,470
2	エッセイ デザイン経営	20.05.28			2,280,960	3,717,090
3	言葉の壁が崩壊しても	19.06.16	2,808,468	2,481,237	2,821,176	2,894,247
4	コロナ禍＋ズーム化の衝撃	20.06.12			31,844	2,230,254
5	言葉の壁の崩壊	19.05.08	1,681,706	1,546,878	1,809,246	1,415,694
6	人工知能の壁	19.10.10	331,215	322,695	378,075	739,100
7	サイバースペースと検索エンジン	19.12.05	247,315	425,718	299,273	578,214
8	技術とビジネスの交差点	20.03.30	464,640	2,109,528	543,150	537,825
9	語彙の壁	19.09.06	1,178,667	166,362	401,505	354,816
10	偶然の連鎖	18.07.23	333,426	568,683	89,326	57,784
11	続・コロナ禍＋ズーム化の衝撃	20.07.06			26,846	54,009
12	エッセイ 我が国、日本の生産性	20.04.22		0	43,296	52,166
13	ビジネスアセスメントから見える食文化変化	20.03.13	355,824	49,244	39,077	50,197
14	エッセイ 5G時代の到来か	20.01.24	0	16,892	0	23,732
15	エッセイ パソコン事始め	15.07.28	0	3,870	8,532	5,174
16	システムズエンジニアリング雑感	19.05.24	4,067	1,280	1,439	1,766
17	エッセイ 見えてきたSCE・Netの世界	19.11.15	38,650	56,233	5,935	1,668
18	エッセイ OR小史	20.05.28			0	1,643
19	偶然の連鎖と時代背景	19.08.10	428,895	416,187	297,367	0
20	エッセイ 生産性とは	20.06.22			16,072	0
	合計		16,764,232	8,164,807	11,506,999	18,695,849

順序付けは、調査日時 2020年8月13日(木)15時で、アクセス数の多い順に並べたものである。

まず、断らなければならないのは、題名に「エッセイ」をつけているものがあるのは、そうしないと、同名の検索対象が多すぎて、少なくとも、検索順位 10位以内に入らないからである（Google や Yahoo の検索確率表は 10位までしか記載していない（筆者(2019)））。

例えば、「生産性」という題名では、類似の検索対象が多すぎて、たとえ「エッセイ」と付け加えても、10位以内に入らないのである。ただし、「エッセイ 我が国、日本の生産性」

にすると、そこそこのアクセス数を記録することになる。もちろん、アクセス数は題名のみ  
に依存するわけではなく、内容にも大いに関係するのは言うまでもないが。さて、「断り」  
はこのぐらいにして、この表を見て驚かされるのは；

**1位**「システム構築による課題解決」(2019年7月11日発行)である。このエッセイは、  
7年前に開催された同名の科学技術振興機構主催「科学技術シンポジウム」(2012年3月  
2日開催)について述べたもので、本年4月のアクセス調査で9百万近くあったアクセス数  
が1か月後に「ゼロ」になり、またその1か月後に2百万に蘇り、さらにその1か月後に  
6百万近くに大復活を果たしている。

何故、このような突如アクセス数が激変するというようなことが起こったかは、読まれて  
いる方々の推測にゆだねて不問にすることにして、そもそも、アクセス数が多い原因は何だ  
ったのであろうか。それは、「システム」という言葉を使いながら、機械系思考が支配する  
理系社会には von Bertalanffy が考えていた「システム」は全く理解できなかったからでは  
なかろうか。

その点、化学系思考にとっては、化学プロセスそのものが、装置系、配管系、そして制御  
系のサブシステムから構成されていることから、なんら抵抗感なく受け入れられたのとは  
対照的だったのであろう。

**2位**「エッセイ デザイン経営」を考えてみる。これは、繰り返しになるが、「デザイン経  
営」では、多くの同名のタイトルの中に埋没してしまうので、「エッセイ」を付け加えたわ  
けであるが、改めて読んでみると、2年前に発表された経済産業省と特許庁が発表した『  
デザイン経営』宣言』を批判している。

要は、行政は「デザイン経営」を「意匠法の改正」をすれば「事足りり」と考えていた  
のである。いうならば「デザイン経営」の真の意味を全く理解していなかった、言い換え  
れば、「デザイン思考」(斎藤滋規他(2017)<sup>2</sup>)にも書かれている「デザイン思考の5つのス  
テップという「プロセス思考」を全く理解していなかったのである。

これは、この著書名が「エンジニアのためのデザイン思考入門」となっているのを考え  
合わせると、文系支配の行政に期待するのは所詮無理な注文かもしれないのかもしれな  
い。しかし、1か月前の7月時点では、「システム構築による課題解決」と「エッセイ  
デザイン経営」がほぼ同じアクセス数であることを考えると、「システム思考」について  
は、理系社会といえども文系社会と同じような状況にあるのかもしれない。

**3位**「言葉の壁が崩壊しても」と**5位**「言葉の壁の崩壊」を考えると、我々社会全体が  
まぎれもなく、自分たちの「英語コンプレックス」を常日頃抱いている証拠ではなかろう  
か。昔々、米国ピッツバーグで開催された石油精製に関する国際会議に参加したことがあ  
った。

その会議で、米国人のスピーカーに対し、誰にでもインディアンイングリッシュであることがわかる質問があった。そして、当然スピーカーが3度にわたって質問を聞き直したが分からず、議長に助けを求めて、一緒に3度聞き返したが、分からずじまいだった。そこで、議長が会議後二人で議論してくれと発言し、その発表に幕を下ろした。

このインド人に対して、呆れると同時に、尊敬の念も同時に沸き上がった。もちろん、スピーカーと議長には尊敬の念を惜しまなかったが。

しかし、いずれにしても、このインド人と同様なことは筆者にはできない。多くの日本人も同様なのであろうか。ただし、もしかすると、若い人たちは様変わりで、そんなコンプレックスには無縁になっているかも知れないが。

そして、リアルスペースはともかく、サイバースペースでは、信じられないことが起きている。例えば筆者が主催する10人足らずの日本語の学会誌のアクセス数が、最近調べたところ、英語名が日本語名の4.5倍あり、合計4,700万になっていた。なお、本文は日本語でも、タイトル、要約、キーワードは英語で併記してはいるが。

そして、数年前の調査ではあるが、アクセスは国会図書館経由で学会ホームページ経由よりも多かった。そういう意味では、お互いに言葉の壁は極めて低くなったのである。これは、おそらく、「グーグル翻訳」のなせる技といえるのではなかろうか。

**4位**「コロナ禍+ズーム化の衝撃」は、まさに今起きてることで、連日、国内と海外のコロナ感染者数が報道されている状況の中では当然といえるかもしれないが、そうなる「エッセイ」という言葉をつげなくとも、このようなアクセスを記録しているのは、「+ズーム化」という言葉が、差別化を齎らしているのかもしれない。

何れにしても、コロナ禍による在宅勤務の普及が通勤型社会を崩壊させ、消費産業に甚大な影響を与えている。コロナ禍とは無関係に在宅勤務が普及するという予言があったが、これほどまでに当たるとは思いもよらないことであった。しかも、ズーム(Zoom)などのネットワーク技術の普及が在宅勤務を下支えすることになるうとはなおさらである。

そして、この在宅勤務はコロナ禍後もなくなることはないのではなかろうか。事実、すでに、そのような宣言をした企業があるし、すべて在宅勤務はなくすと宣言した企業もあるが。

このような影響は、通勤社会にとどまらず、通学社会にも影響を与えることになるう。現に多くの大学が実施しているように。

以上が、100万を超えるアクセスのあった5つのエッセイについて述べた。その他のエッセイで目に付くのは、

- ・6位「人工知能の壁」は順調にのぼし、結局当初の2倍になっている。
- ・7位「サイバースペースと検索エンジン」は、増えて減った上で結局増えている。

- ・ 8位「技術とビジネスの交差点」は、一時何と 200 万を超えたが、その前後は 50 万台に推移している。
- ・ 9位「語彙の壁」は、当初は 100 万を超えていたが、増えたり減ったりしたのちに結局減少している。同じような「言葉の壁」に食われた感がある。
- ・ 10位「偶然の連鎖」は、一時 50 万台になったが、結局最後はその 10 分の 1 になってしまった。

以上、振り返ってみると、やはり「システム構築による課題解決」は、アクセス 598 万で全検索数 1870 万の約 3 分の 1 を占めていることから、圧倒的な存在感を示している。また、「エッセイ デザイン経営」も発行がたった一か月前だったにも拘わらず、372 万で、合計すると両方で 970 万、52%を占めている。

この両者の共通点を調べてみると、前者は Cleland & King (1983)<sup>3</sup>の表／産業プロジェクト・フェーズ・ステージと Sage(1983)<sup>4</sup>の表／社会プロジェクト・フェーズ・ステージを引用している。一方、後者は斎藤滋規他(2017) (前出) の図／デザイン思考の 5 つのステップと Annemiek van Boeijen et al. (2013)<sup>5</sup> の図／ブランド主導型イノベーションモデルを収録している。すなわち、何らかの手順を表あるいは図で示していることになる。

ということは、結果的にではあろうが、この 2 件は業界、行政あるいは社会が抱える課題解決のための実現プロセスに興味を持たれて読まれているのではなかろうか。筆者が執筆しているときには、批判するつもりはあっても、必ずしも提言するというような明確な意識を持たなかったように思うからである。だとすると、筆者の意図を超えて、この 2 つのエッセイは誕生後に新たな道を独り歩きしているようである。早とちりかもしれないが。

## 文献

- 
- <sup>1</sup> 小松昭英、言葉の壁の崩壊、SCE・Net の窓 E-105、化学工学会産学官連携センター、2019 <http://sce-net.jp/main/wp-content/uploads/2019/05/e-105.pdf>
  - <sup>2</sup> 斎藤滋規／坂本啓／村田陽子／角征典 (東京工業大学エンジニアリングデザインプロジェクト)、エンジニアのためのデザイン思考入門、大内孝子編著、翔泳社、2017
  - <sup>3</sup> Cleland, D.I., King, W.R., Systems Analysis and Project Management, McGraw-Hill, 3rd Ed.1983  
(上田惇生訳、システムマネジメントーシステム分析とプロジェクト組織、ダイヤモンド社、1969)
  - <sup>4</sup> Sage, A.P., Economic Systems Analysis, North-Holland, 1983
  - <sup>5</sup> Annemiek van Boeijen, Daalhuizen, J., Zijstta, J., Roos van der Schoor: Delft Design Guide- Design Methods, Delft University of Technology, Faculty of Industrial Design Engineering, BIS Publisher, 2013  
(石原薫訳、デザイン思考の教科書ー欧州トップスクールが教えるイノベーションの技術、日経 BP 社、2015)